



巨乳保母・屈服レイプ

序章 美人保母との朝情事

\*\*\*



「あっ！ あっ！ アッ！ 知夫人（ちぶと）さんのおちんぽ大っき：ア！  
♡ ヤンだめ許して！ 幼稚園に遅れちゃう！ あん！ イク！♡ おまん  
こイクウー……♡♡♡」

「あー！ 朝一番で犯す沙紀（さき）の現役保母まんこ気持ちいいー！ あ  
ったかくて柔らかくてヌルヌルで！ 母性溢れるおまんこ肉がチンポ包んで  
抱き締めてくるウー……♪ ウハア……♪」

ぱんぱんぱん！ ぱんぱんぱん！ ぱんぱんぱん……

「あっ♡ ア……… イック……♡ イクウ！ いくいく  
イッちゃう！♡ やんだめいっちゃう……！ おまんこイクウ……  
……♡♡♡」

ぶひゅー！ ぶひゅひゅー！ ぶひゅひゅひゅひゅー……

――！

「ッ！♡ ックぅー――――♡♡♡♡ ♪♪♪♪♪…イ  
ックぅ〜〜〜〜〜〜〜〜♡♡♡♡」

プシュー――――♡

台所のシンクに手を付き、丸い尻をツンとイヤらしく後方に突き出した若い女が、愛液と潮の混ざり汁を勢い良く噴き出した。

「んっ♡ あっ…！ ああ〜〜〜〜〜〜…♡♡♡♡」

耳に甘たるく絡む幼げなアニメ声で、甲高く喘ぐ。そんな悩まし気な嬌声を漏らしながら、女は盛大に絶頂した。

この美女は俺の中で僅差で「二番目」にお気に入りの現役保母のお姉さん、岡野沙紀（おの さき）である。

俺が買い与え、今現在履かせている薄ピンク色のフリルの付いたレースの紐パン・バックというドスケベなおパンティー。

その頼りない薄布を纏い、淫らに彩られたまん丸い白いお尻は、Ｔバックという下着のデザイン故に尻肉の生肌が多く露出してしまっていた。

そして激しい交尾によって桜色に染まった尻肌を弾くように玉の汗が浮いており、汗付きのその湿った尻はイッた快感でピクピクと小刻みに震えている。

「あっ！ あっ！ はあっ！♡ ああ…！♡ アハン…」

クロッチ部分の間から又挿れた俺の肉棒は、沙紀のイキイキおまんこにギュウと締められ射精後も溫柔な肉壁の抱擁を受けている。膣内のウネウネした肉の蠢きがもたらしてくれる心地良さを、たっぷりしつこく貪るように堪能してゆく。

「ハァっ！♡ ハァ…、ハァ…！♡」

俺からのピストン運動でイキ、直後に出し射精されて更にイクという連続重ねイキを味わわされた沙紀。強烈な強制二連続の性的絶頂に、青息吐息

だ。

ぬりゅ…ん…

「ああん…♡」

朝も早くから猛烈な連続イキで快樂の大波に吞まれ、ゆっくりとちんこを抜かれた後は脱力しキツチンの床に女の子座りでしゃがみ込んでしまった。

「ち…知夫人さん…。ホントに幼稚園、遅れちゃ…ウムうううううう!?」

♡

ぶじゅぽっ!♡

自分の足元に女の子座りで傳く沙紀の口内に、一直線にちんぽをブチ込む。



「うるさい口にはフタをしてやる。 そう! 綺麗にしろ!」

「あむあ! んぶっ…♡ んぶっぶぶっ!」

長い黒髪を耳たぶの下で二つに束ねたローツインテール。それを兎の耳を掴み上げる様に持つ。

そして股間に向けてグイグイと引っ張り、美しい沙紀の顔をオナホール如

くモノ扱いしながら乱暴に口コキを開始した。

「おら、舌を使え！ お前のまんこを使ってやった有り難いおちんぽ様に、感謝のフェラチオ奉仕をするんだ！」

「もおぶっ！ うむえあ♡ ンレロレロレロ♡ れえろおん♡ チュブ、チュブ♡ んぶっちゅうううううう♡ れえろおおおお♡」

俺の足元に跪く、二十代前半のピッチピチの現役の美人保母。

そのブルブルの小さな唇を男根を挿入して押し広げ、紅く溫柔な口内をおまんこの様に使ってやる。

沙紀は眉をキュウとハの字に曲げ困り顔になり、マゾヒズムに満ちた切なげな目で俺を見上げ、可憐な美貌をちんぽ顔に歪めてブッチュ、ブッチュと男根を口の中に出し入れする。

沙紀の口内粘膜の温かさは実に気持ち良く心地良く、俺の肉棒に素晴らしい快感を与えるのだ。

「うれれお♡ お、お願い知夫人さぁん…。 ンブッ！ もおこれ以上は…おちんぽしてたら幼稚園に遅れるう…！ ハアハア…！♡ …遅れちゃいましゅうううう…んうううう…！♡」

沙紀が喋っている間もおまんこにブッポブッポと出し入れし、全く女体に気遣う事なく自分の快感のみを追及した激しい口淫セックスを強要する。

「ん？ そんな事を言って…俺に逆らっているのか？沙紀…。 園にお前の『秘密』を今すぐ報告してもいいんだぞ？」

「…っ！ んっ…んじゅううううううう…！ じゅろろろろ…！ じゅぞぞぞぞ！ ずずっ！ じゅぞお！」

俺が沙紀の『秘密』の暴露を仄めかすと、それだけは止めてくれと言わんばかりに猛烈なバキュームで肉棒を吸い上げ始めた。若い女の口中の温かさが伝わるのと同時に吸引する事で唇と男根の間に断続的に空気が入り、それが破裂する衝撃がブポブポとちんぽを叩く。

「おいしいぞ！　そうしてお前は素直に俺のちんぽに舐めていればいいんだよ！　お前は俺のザーメン便器だ！　この…便所女がっ…！」

「ンレロレロレロ♡　えぶっ♡　ぶっ、ぶっ！　んっ、んっ、ん…！♡　えあ♡　んえあああああ…！」

四十も半ば過ぎの不潔でだらしない体型のこの俺が、父娘ほども年の離れた二十二才のピチピチで巨乳で細腰の桃尻美人保母を朝から犯す。

好き放題におまんこに挿入し、小ちゃくて温かいお口に饅えた匂いのある行為直後の男根をブチ込んで、口内粘膜を蹂躪する。その肉体的快楽と精神的愉悦感は極上の一言だ。

「あむうれえ♡　れえっ♡　えれえれえれ♡　じゅるじゅぼ！　じゅずずず！　んぶっ♡　んぶぼ！　れるれるれる♡　れるるるるる♡」

その後もたっぴり奉仕させ沙紀の口中にドクドクと白濁を注ぎ込んだ後、乱れた服を整え二人揃って出勤の支度を始め、ようやく家を出る準備が完了する。

「んしよっ…、ア…？　キャッー！」

玄関で靴を履く為、身を『くの字』に屈めて片足を上げる沙紀。

その沙紀の後ろ姿はミニスカからムチプリの丸尻をコチラに向け、セックスで濡れ新しく着替えた黒の下着がチラチラと見えており、酷く卑猥だ。

まるで俺に犯してくださいと言わんばかりに、その艶淫な水蜜桃の様な尻肉とパンティーが玄関を出ようとする俺の視界いっぱいに広がっている。

「なあ…もう一回いいだろう？　沙紀…！」

「ヤッ…！　ダメです知夫人さん…！　もお本当に、ダメエ…エッ！♡

あ！　んああアーン！♡」

にゅぶずずっ…っ♡　ぬぶんっ…！

「あっ！♡　っハァーン！」





誘う丸尻に吸い込まれる様に沙紀に後ろから覆い被さり、パンティの間からヌブッ♡と差し込む。そして両手では沙紀の美巨乳を掬いあげる。

ぼちゅっ！ ぼちゅっ！ ぼちゅっ！ じゅぽおっ！

「あっ！ あっ…！、 あっ！ あっ♡ ア！ あん！ あふん！」

沙紀のおまんこが、俺のおちんぽに、にゅにゅちい♡としがみついてくる。

「はぁっ♡ あっ…！ あ…アンっ♡ あぁっ…、あぁっ…、あぁっ…♡」

挿挿に合わせて、ガタガタと玄関の扉が揺れる。沙紀が扉に手をつき、俺からのピストンの衝撃から体を支えている。玄関で、立ちバックでの出勤直前のおまんこ行為だ。

「あっ…いや…。 あっ…！ やぁ…、 ヤアン…！」

口では嫌がっても、沙紀は背後から突かれるセックスでは必ず自分から尻を後方にツンと突き出し、膣奥にちんぽを導くように腰を振ってくる。

そのスケベな動きは無意識な様で隠しようがなく、沙紀が自分からちんぽを求めてくるこの独特の下半身の蠢動が俺は大好きだった。

若く美しい娘を後ろから支配する事で、俺は生物のオスとして非常に満ち

た気分を味わえるのだ。

ばす！ ばす！ ばす！ ばす！

「あ！ あ！ あっ！ はん！♡」

着衣セックスで履いたままのフレアのミニスカートとTバック紐パンティが、乾いたピストン音を衣擦れ音混じりの鈍い衝撃音へと変えている。

「おい沙紀、こんな玄関の扉の前で大声で喘いだら、外まで声が聞こえてしまっぞ？ いいのか？ 清纯清楚な保母さんが、朝からおまんこさされてアンアンよがってると周りに知れてしまっぞ？ うん？」

「…やっ…！ …っ！♡」

沙紀が片手で口を塞ぎ、淫らな嬌声をあげるのを防ぐ。美人な保母が仕事前に快感を堪え声を抑える姿は俺のサディズムを滾らせ、もっと苛めてやりたい気持ちが溢れてくる。

どす！ どっちゅどちゅ！ ばん！ ばん！ ばちゅん！ ぐりり！ ぐりり！ どっちゅん！

「っ！♡ っく！♡ …っア！♡♡」

ばすばすばす！ どずどずどずん！ ぬぐずちよ！ すちよちよん！

「…っ！♡ ア！ ひあっ！♡ あダメ！ あっ！ あーーーーー！

ー！♡」

声を出してはいけないという状況で、無防備に下半身を突き出す沙紀のおまんこを背後からこれでもかと力強く、乱暴にピストンする。

どっちゅ！ どっちゅ！ どっちゅ！ どっちゅ！

「ひあっ！ ひいん！♡ いひいん！♡ んああっ！ ダメッ♡ あアーーーーー！♡」

余りの抽挿の激しさに、沙紀は声を抑えきれない。尻に与えられる衝撃に押し出される様に淫らな喘ぎ声が洩れ出し、あられもなく泣き叫ぶ。

「やっ…！ らめっ♡ ちびとせ…らめっ！ こえれちゃう…！♡ さき





普段は地味なジャージに覆われていても、その艶めかしさを隠しきれていないパツンパツンに張ったはち切れんばかりの尻の丸みは実にソッられる。

「あっ…、あっ！♡ あっ…あっ…あっ！♡ う〜〜〜っ！♡ いっ…、くう〜〜〜〜〜〜〜〜〜…！♡」

まん丸に膨らみ実った桃尻肉は酷く扇情的であり、見る者を吸い寄せ生殖行為を誘引するのだ。

その魅惑の丸尻を抱え、存分に揉んで尻の柔らかさと弾力、スベスベした肌の感触を愉しみながら最後の一滴まで種付け液をドクドクと中出しする快感は本当に素晴らしい。

「ああ…♡ んああああ…！♡ ちぶとさんのおちんぼ…すごいい…♡ 気持ち…、いいいいいい…！♡」

尻の谷間が、キュン♡キュン♡と内側に痙攣する。

沙紀のまんこが俺のちんぽを逃がすまいと締め付け、中出し後も愛の抱擁をしてくるのだ。

射精後の敏感ちんぽを若い膣肉の蠢動で締め上げられては堪らない。

俺のちんぽに極上の快楽が再び襲いかかって来る。

「ふふ…いいぞ。可愛いぞ？ 沙紀…。お前は俺の精液便所だ…。これからタップリとこのおまんこを使ってやるぞ。」

絶頂の快楽に痙攣し波打つ魅惑の尻肉。その尻肉に手を置き、肌の湿り具合を確かめる様に撫でながら、俺は股間に力を込める。

「ふんっ…！」

「はあ…♡ ああっ…♡ …えっ？ あ！？ あああああああああ！  
ヤアアアアア…」

じょろろろろろ！ じょお…

「あっ！ あ… ヤッ…！ おしっこ…！ ヤダ！  
ヤダ…」



「アッ…！ やんツ…♡ まだ…、まだ出てる…！ んああああん…！♡」  
俺は尿道に留まった残尿をチヨロチヨロと沙紀のまんこに注ぎながら、目の前の美人保母をこうして支配するに至った幸福な出来事が起きたその日の事を思い返した…。

\*\*\*